

## 『和裁入門・専科』

『気軽に楽しめる 手結びきものの着付け(朝)』

『気軽に楽しめる 手結びきものの着付け(昼)』

(学)清水学園 清水とき・きものアカデミア着装正教授 高椋豊子先生

### 『きもの、その美しき日本のこころ』

リオオリンピックの「フラッグハンドオーバーセレモニー」で世界に向かって五輪旗を振りかざす小池東京都知事。艶やかな和服姿は皆さまの記憶にも新しいことと思います。今や和服(着物)は世界に誇る日本文化の一つでもあります。その着物の『着付け』と『和裁』の講座。当センターの前身”大府・共和教室”の時代からお世話になっているのは高椋豊子先生。お着物をこよなく愛し、和服姿の美しい方です。

かつて、先生はお子さんの幼稚園入園をきっかけにこの道に進まれました。やり出したらやり抜く性格。検定もどんどんチャレンジ、やがて清水学園からの推薦で講師の道へ。ご自身のセンスも功を奏し「着物の柄合わせを皆さんにとっても喜んでいただけた」ことが、「着物のお仕事にとっても向いている」と、自他ともに認めるところとなり今に繋がっているそうです。現在、高椋先生は『東京清水学園評議委員』も務められて多忙な日々を送っておられます。

次に講座のご説明をします。まず、”和裁”ですが、「上前・衽(おくみ)・左前と右後ろの袖」の柄合わせをポイントにして断ち合せます。次に標(しるし)付けをして縫い合せてゆきます。その際、着る人の体形と顔立ちに合った”柄合わせ”を心掛けます。技術と柄合わせのセンスがとても大切。そこに作り手の愛情を加えて、美しい着物に仕上がります。高椋先生は、生徒さんの技術やセンスを丁寧に上手に引き出す事に定評があります。



和服を装うことにおいて、”着付け”は「コケシのようなずん胴を基本体形」としている為、『着る人の体形をいかに補正していくか』が、重要になります。『東京清水学園の着付け』は、器具を全く必要としない日本古来の着付けをベースとしています。そのため、要所をタオル等できちんと補正する技術が”着付けの大きなポイント”となります。それは、着くずれの少ない、着心地の良い、ひいては「美しい着付け」に結びつきます。先生はそれをしっかりと伝授されています。

着物には四季折々に、『着時』というものがあります。日本の粋でしょうか、季節を半月ほど先取りして衣を替えてゆきます。その『着時』を生徒さんに正しく伝え、セレモニーに着る着物のアドバイスもされます。高椋先生のその一言がとても的確で、おしゃれに着れる秘訣として生徒さんにはとても好評です。どうやらそれは”魔法の一言”らしく、生徒さん達はセレモニーの度に、先生の魔法で「ステキな大和撫子」へと変身されています。

「きちんと仕立て上げた着物は、美しい着付けができます。美しく着付ければ、美しいたたずまいが生まれます。”和裁”と”着付け”は、常に表裏一体」

高椋先生はおっしゃいます。「着物は脈々と流れる日本の心です。ひとりでも多くの方に広げて、その心を次世代に伝え、未来へと繋いで行くこと。それが私の仕事だと思っています」…凛としたその姿を、眩しく感じる瞬間でした。